報告②

（特集）各地の高校魅力化プロジェクトを紹介　奥尻高等学校の町立移管と高校魅力化（上）

町立に移管した奥尻高校が取り組んだこと

（1）経緯、教員集団の変容と教師の成長

青山学院大学　樋田　大二郎

キーワード　高校魅力化、地域学校協働、町立移管、小さな学校、トータルコーディネートの進路指導、全教員で実働、いい意味の忙しさ、周りを巻き込む

町立に移管した奥尻高校が取り組んだことについて、松原聡史教諭、井上壮紀教頭、清水信彦校長の三人の先生に対して集団インタビューを行った。

町立への移管の時に奥尻高校は隠岐島前高校を視察し、同校がしていることを奥尻高校でも行いたいと考えたと言う。

視察とは別に進路指導の視点からは、卒業生が島外に出てから進学・就職先での人間関係に苦しんでいるので、高校時代に新しい人間関係を経験させることを目標にした。もう出口教育をするような時代でないことは分かっていたので、トータルコーディネートを志したとのことであった。奥尻高校の一番の理想は卒業生が大学で勉強したり、社会でいろんなことを経験したりして、いつかは島に帰ってきて、島のために働くことである。そういう気持ちを育てていくことを進路の使命としたという。

インタビューでは若い先生の教師としての成長について、自分で考えて町の人と話をして、悩んで、みんなで協力して作って、生徒が成長するのを喜んで泣いてっていう学校なので、若い先生にとっては最高のスタートになる……と語られた。

教員が育つことについて尋ねたところ、小さな学校で、尚且つ自分が考えたことが実現できるので、やりがいを感じることになる。町おこしワークショップは自分が手掛けて、みんなに協力してもらってやっ

たんだという自負や、達成感を感じることになる。言われたことだけやっているというのは、ほんとに三カ月ぐらいでもう許されなくなる。そこが重要であるということであった。

教員の成長が感じられるのは、プレゼンがどんどんうまくなることで実感できると言う。

高校魅力化の取り組みの運営組織は教師集団の成長の状況や取り組み内容の変化に応じて変わって行ったことが分かる。たとえば誰を呼ぶかは、一年目は特に担当はなく、この人面白そうだねって言いながら決めたという。二年目はもうちょっと形にしたいという思いから、進路でやらせてくださいって言って進路に持ってくるみたいな感じで、結構みんなで取り合う感じになったという。去年からは「すいません。全員でやりたいんですけど」という提案に対して「いいよ！」となり、全教員で取り組んでいること、全教員が担当だけでやらせようなんて思ってないという雰囲気があること、が語られた。

また、島の抱えている課題は結構ほんとにギリギリのことなので、それをみんなで何とかしたい。仲悪くなっていたら、停滞してしまうという危機感がある。まず自分でやってみなさいということで若い教員も育っている。周りも巻き込みながらやっていかなければ駄目なので、それが奥尻高校の教員集団の組織がうまくいっているところだとの語りがあった。

※二〇二〇年四月一日付けで井上教頭は北海道札幌英藍高等学校へ、松原教諭は北海道伊達高等学校へ異動されました。

１　奥尻高校の魅力化の背景と目的、誕生の具体的なきっかけ

――それではお願いします。奥尻高校については、去年まではほとんど知らなかったんです。去年の留学フェスタで、まずこのポスターが目にとまりました。奥尻ブルーの中で、生徒さんがスキューバダイビングをしていました。どんなところだろうということで、どんどん関心が高まりました。

私自身も島根県の吉賀高校と都鄙（ひ）間高大協働探究活動を行っています。高校生、大学生にとってはとてもエキサイティングだし、大事な体験になっているに違いないと思ってやっています。本日は、質問の中で調査研究的な内容とそれから自分がやっている実践をどうしたらいいのかなと考えている視点との二つから質問させていただきたいと思います。

松原教諭：サクラマスプロジェクトがある。

――そうです。吉賀高校ではサクラマスという言葉を使っています。

松原教諭：すごい。面白いですね。やっぱり起業家教育なんだ。すごいですね。面白そう。

――ありがとうございます。ここに書いてあることを順番に質問させていただこうと思います。奥尻高校さんの魅力化の取り組みについて

お伺いしたいと思いますが、まずその背景と目的、誕生の具体的なきっかけのあたりをお願いいたします。

2　町立移管がきっかけで　トータルコーディネートの進路指導を

松原教諭：町立移管をして、そのときの校長が隠岐島前高校に一度視察に行って、こんな学校もあるんだよって話をまずしていただいたのと、そのときにもう生徒数も人口も減ってるっていう課題はずっとみんな持ってたので、何かしなければねっていうところで、隠岐島前高校の情報を得て、奥尻でもできないんだろうかと。生徒を呼び込むってことは可能なのかっていうことで、そのときのメンバー、校長がメインになっていろいろと住む場所とか、ほんとに受け入れることは可能なのかとか、ルール上の問題もなんですけど、あとはそもそも来たいっていう子はいるんだろうかみたいな感じで募集をかけるようになったっていう形ですね。

僕はそのとき進路担当で、そのときに進路指導部が抱えてた課題の一つとして、卒業生を出しても、帰ってくるのがすごく多かったんですけど、その理由の一つが生まれてから高校までずっと同じメンバーで生きてきた中で、島外で初めて新しい人間関係の中で生きていかなきゃいけないというそのときに、ほとんどの生徒が苦しんでた。

という意味では、高校生のうちに今まで一緒に暮らして来てない人と関わる経験をさせてあげられれば、島内の子たちにとってはすごくプラスになるなというのが進路指導部としての気持ちというか。なの

で、ぜひそこは入れてほしいというのが進路の考えでしたね。で、入ってきた感じですかね。五人ですね。スタートは。

それで、生徒を呼ぶようになって、僕たちは新しい企画というよりかは、もともとあった取り組みをより良くしてこう、みたいな感じにあったのかな。ただ、まなびじま奥尻プロジェクトっていうのは校長がドーンと打ち出したので、今、奥尻高校にあった課題を全部あぶり出して、それに対する対応をどうしたらいいんだろうっていうのをできるところからどんどんやっていったっていう感じですね。

――進路指導が進学させたり、就職させたら終わりというようなことも起きがちだと思うんですけども、進学、就職後の生活のことにまで関心が及んだというのは、どういうようなことだったんでしょう？

松原教諭：もう出口教育をするような時代ではないなっていうのは、もうわかり切っていたことなので、トータルコーディネートっていうイメージを進路では持っていました。やっぱり問題は島をどうにかしようって思う人たちがなかなかいない現状もあったりネガティブな人も結構いたりして、そうではないよねっていうところもやっぱり日々感じてはいたのかな。そう考えていたので、一番の理想は子どもたちが大学で勉強して、社会でいろんなことを経験して、いつかは島に帰ってきて島のために働くっていう、そういう気持ちを育てていくことが進路の使命だと思って話し合っていたので、そういう意味では入れちゃえばオッケーっていうのは全然考えもしてなかったですね。

――その場合、大学に行って何を学ぶとか、どのようなものを見てくるとかそこまで踏み込まれたことはありますか。

松原教諭：はい。結局目指すはUターンとSターンなので、島内出身の子はUターンしてほしいし、島外からきた子は高校で学んで出てまた戻ってくるSターンをしてもらいたいので、やっぱりどこどこ大学に入れたらオッケーではなくて、そこで何やるんですかとか、それが結果的に島のどういう課題につながってくるのかってところまでなってもいいと思うんですよね。

その子の人生なんですが、ただそういう視点では見てもらえた方が、そうしないとこの島がなくなってしまうので、消滅可能性都市四位なので、そこの危機感はかなりあったかなと。やっぱり彼らの故郷をなくすわけにはいかないという思いはすごく強かったので。

――松原先生はさらっとおっしゃいましたけど、なかなかそこまで考えるっていうのは、稀なケースとは言いませんけど、そこまで考えるのは難しいと思うんですけども、それは何かがあってそういう考えに至ったんでしょうか。

松原教諭：どうなんですか？

井上教頭：どうなんだろうね。一番大きいのは町立になったからだよね。みんなで危機感を持ったんだよね。

松原教諭：そうですね。僕が来た年は、初めは道立なので、四年間もしくは、五年間ここで我慢すれば札幌とかに行けるみたいな雰囲気だっ

たんです、正直。

なので、山の上にあるので、ちょっと別枠。何かイベントがあってもうちは高校だからっていうのが正直あったとは思うんですよね。ただそれが町の学校になったので、教育委員会の人と話す機会も増えてくるし、役場の人たちと付き合うことも出てくるしっていう意味ではやっぱり。

で、うちはすごく若い教員が多いので、そういうことにかなり柔軟に対応する方なのかなと。何よりやっぱりそっちの方がすごく価値ある教育な気がしてることが多かったですね。確かに数学だけ教えて、偏差値上げたと言えるっていうことも素晴らしいんですけど、それはほんとにここでやることなのかなというか、それは別にそういう学校があるので、そこでやってもらえれば良くて、島だからできることは何だろうって考えると、生徒数がすごく少ないので一人一人どういう生き方したらいいんだろうってみんなで話し合ったり、面談したりはしやすいので。

3　教員の地域、生徒、高校に対する思い

――町立に移管することで、例えばこの高校の在任期間と言うんですか。それも長くなるわけですか？

清水校長：いや、そこは特に変わらないですね。

――松原先生は、ご結婚なさってるように思うんですけれども、家族ってこちらにいらっしゃるんですか？

松原教諭：家族でいます。

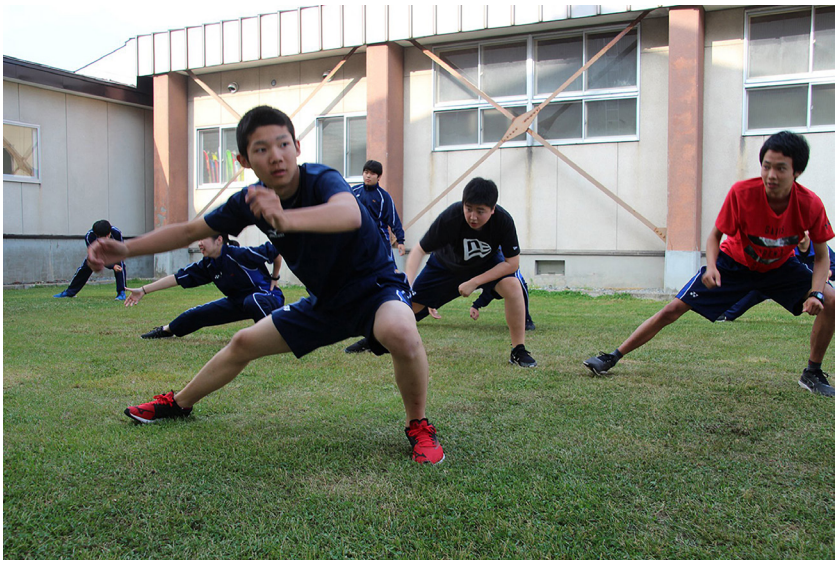
――家族で来てるんですか。

松原教諭：ちょっと僕、もともと期限付きでここの島の中学校にいて、一年だけ離れて、教員採用試験に受かって、高校で戻ってきてるんですよね。で、嫁は来てて、子どもはこの島にいる間に生まれた子たちなのでっていう感じですね。なので、うちの息子にとっても故郷はここなので、やっぱり大切にしたい。

――ほかの若い先生は別に結婚していなくても、この町を大事にしたいといった町に対する思いが強いのでしょうか。それとも高校や高校生に対する思いが強いのでしょうか？

松原教諭：どうなんだろう。どっちもなのかな。去年異動した教員がみんな口々に言ったのは、初任がここで良かったって言ってやっぱり出て行きますね。結局言われたことだけやってればいい学校ではないので、自分で考えて町の人と話をして、何が必要なのか悩んでみんなで協力して作って、生徒が成長するのを喜んで泣いてっていう学校なので、若い先生にとっては最高のスタートなのかなっていう感じで結構みんなワイワイやってるんだと思うんです。

――素晴らしいことだと思います。若い先生は最初は大きな学校で育てるべきだと主張される方もいらっしゃる中で、この学校に来たから



こそ自分で主体的に動けたし、生徒の成長も見ることもできたという、そういうふうに聞きました。

清水校長：今の教育には合ってるのかなと思います。答えはないはずなので。この学校は生徒をきちんと見て、ともに悩んで、常に関わっていて、答えがないはずの教育を日々実践して、主体的に動く生徒を育てています。毎年同じ企画をやるわけにはいかずに、入ってくる生徒は質が全然変わるので、同じ企画を同じようにやっても全然通じなくなってしまいます。生徒を見てちょっと変えなきゃとかこういう段階に来たからこういうステップを踏んで、レベルアップしたこれをやるという感じで進めています。

4　取り組みの運営組織

――次に取り組みの運営組織について教えてください。例えば、町おこしワークショップの運営組織など。

松原教諭：町おこしワークショップっていうのは、もともと昼休みにやるかなって言って、町の人を呼んできてしゃべってもらうみたいなところからスタートしているので、担当は特にいないんですよね、スタートは。ただ、誰呼ぶかっていうのは、この人面白そうだねって言いながら決めたぐらいで、二年目はもうちょっと形にしたいよねっていうことで、進路でやらせてくださいって言って、進路に持ってくるみたいな感じで、結構みんなで取り合う感じですかね。これはうちでやりたいなとか、これはうちでやりたいよとかっていう感じで、組織

は一応、普通の学校のように教務部があったり、生徒指導部があったり、進路指導部があったりはするんですけど、このイベントは誰っていうのはそこまでない感じかなと。

――なるほど。

松原教諭：結構うちの先生たちはほんと面白くて、例えば町おこしワークショップっていうのは、もともと進路だけでやっていたので、実際は三人で回していたんですが、去年から「すいません。全員でやりたいんですけど」って言うと結構「いいよ」って言ってくれる先生たちなので、去年からは全教員で取り組んでいるので、音頭を進路でとっているだけで、実際実働で動くのは全教員っていう。うちは結構そういうの多いんですよね。講演会やったり、誰か来てもらっても担当者だけが体育館にいるのではなくて、全教員が楽しそうに観に来るので比較的そういう感じかなっていう気はしますね。

――場合によっては、探究の時間なんかでも、それは理科だけにやらせとけばいいとかそういう学校もないではない中で、みんなでやっているのですか。

松原教諭：雰囲気なんでしょうね。当たり前に、

清水校長：全体でやらなくてはいけないというふうに、みんな思ってるんですよね、全教員が。

要するに担当だけでやらせようなんて、さらさら思ってないという

雰囲気があります。

松原教諭：思ってないですね。

井上教頭：今、松原が言ったように担当はまずその企画して、音頭をとるような形で、それを全員でやりましょうというのが、ほとんどの行事のスタイルなのかな。

で、そこに地域の方々を巻き込んでやるっていうのがうちの最大の魅力だと思います。

――そうですよね。

5　教員が育つとは

清水校長：やっぱり大きな学校だったら、例えば生徒指導の中でも、変な話、落とし物係とか一つの担当しか当たらないんですが、ここの学校は小さな学校で、尚且つ自分が考えたことが実現できるんですよね。

そのことにやりがいを感じると思うんですよね。町おこしワークショップは自分が手掛けて、みんなに協力してもらってやったんだという自負というか、そういう達成感みたいなのも感じるだろうし。そうして教員の力が伸びるので、それは奥尻高校から異動したら、その学校で中心的な役割を担うことができるような教員が育っていくのかなと。生徒もそうだし、教員もほんとに育つようなそんな学校なのかなと思います。

――松原先生の目から見て、あの先生は変わったよな。伸びたよなというのは、どんなふうにしてわかりますでしょうか？

松原教諭：結局、もう言われたことだけやってるのは、ほんとに三カ月ぐらいでもう許されなくなるので、そこだと思います。職員会議も最初の一カ月目とかで当然しゃべらされるので、最初は緊張して何しゃべっていいかわかんなかった先生が、ブツブツ練習して、次の職員会議ではもうペラペラしゃべったり、何か資料作ってプレゼン風にしてみたり、寸劇やってみたり、とにかく伝えること大事だよねって、そもそもそうやって生徒に言ってるよねってなったり、見てて単純に生徒と変わらないと思います。

プレゼンは、どんどんうまくなったり、生徒にプレゼンの見本を見せるために自分のプレゼンを練習するのでそういう成長は多いのかなと。面白いです。だから今週やるピアサポートっていうのも、養護教諭が全部仕切るんですけど、今年からその先生が仕切って、全七回あるんですけど、入学して次の日にまず一回目やって、緊張してもう口からっからでやってたんですけど、今、結構余裕ぶってやってますね。

清水校長：仕切るのが当たり前のようにやってますね。

松原教諭：今年度一番最初に全校生徒の前でしゃべったのが養護教諭っていう。

清水校長：三年目の養護教諭です。

6　みんなで力を合わせる理由は、忙しいから

――教員同士で後ろ指を指すとか、陰口を言うとかそういうことがないというのは、どういう秘密があるのかを知りたいです。奥尻高校のことを報告書に書いたら、でもうちの学校の雰囲気じゃそれは無理だと思われてしまう場合もあるかと思います。そういう時に参考になるような何かがあれば教えてください。

松原教諭：後ろ指、指されてるんですかね（笑）。正直わかってないだけなのかな。いい意味で余裕はないのかなと思います。島の課題は結構ほんとにギリギリのことなので、時間のかかる仕事は、この学校はそこまで忙しい学校ではないと思うんですが、島の課題は結構やっぱりほんとの課題なので、それをみんなで何とかしないとっていう思いはすごくあるのかな。あとは何でしょうね。でも、最初来た年は陰口ありました。それはほんとに覚えてます。その場から一人いなくなったら、みんなでその先生の陰口を言ってみたりとか、よくありがちな。

清水校長：職員室？

松原教諭：職員室はすごかったですね。今は全然それがなくて、それはなんでなんだろうな。

清水校長：いい意味で忙しいんだよね。

松原教諭：そうですね。

清水校長：そんな人の陰口言ってるような暇がなくて、みんなでやらなくては、ここでの取り組みは絶対継続できないので、そこで人の陰口を言って、仲悪くなっていたら、停滞してしまうという危機感もあるので、そんな雰囲気があるところが大きいのかなと思います。結構生徒に主体的にやらせることも多いんですよね。

教員が失敗してもいいからやりなさいというようなスタイルがあって、それを教員でも松原先生みたいなミドルリーダーが初任の先生方に生徒と同じように、やっぱりやらなければわからないことはあるので、すべてリーダーがやるわけではなく、まず自分でやってみなさいということで若い教員も育っていっています。

だから、さっきの養護教諭ではないですけども、ほんとは人前でやるのはすごく苦手というような先生でも、四月からやっていて、今ほんとに普通に当たり前のように、全校生徒の前で運営していくような、そういうことができるので、教員もほんとに育っていってます。あとはみんながそれぞれが忙しいので、自分の役割が決まったら人任せにできないというところもあるんですよね。

松原教諭：それはあるかもしれない。

清水校長：責任を持って、最後までやり遂げなければいけないので、もちろん相談しながらですけど、そういう部分が成長につながってるのかなと思います。ほんと先生は一つ一つの大きな任務が結構立て続けにあるのですけど、それをこなしていくんですよ。

ただし一人では勿論できないので、周りも巻き込みながらやっていかなければ駄目なので、それが奥尻高校の教員集団の組織がうまくいっているところなのかなと思ってます。

――おそらく、生徒さんたちも同じ思いでいろんなことに取り組んでらっしゃるんですよね。生徒さんたちにあちこちでインタビューすると、今、校長先生がおっしゃったようなのと同じことを生徒さんの口から聞きます。そういうことがもしかしたら大事な要素かなというふうに思っています。

清水校長：そう思います。

――役割が決まったら、そいつに任せるというよりもその人がほかの人と相談しながら、自分の使命感と責任感を持ちながら一歩前へ進んでいくというようなそういうチャンスになっていくというような話だというふうに聞きました。